

## 4. 結果母枝先端芽せん除処理による省力化（刀根早生）

### 【技術の概要】

カキの摘蕾・摘果作業は果実肥大に最も影響を与え、大玉果実生産のための必須作業です。しかし、これらは年間作業時間の3～4割（44時間/10a）を占め、重労働となっています。特に、摘蕾作業は作業適期が開花前2週間と短期間に集中するため、作業適期を逃さないよう、効率的に作業を進める必要があります。

本技術は、冬季せん定の際、結果母枝先端の芽をせん除し、着蕾数を減少させることによって摘蕾作業を軽減する技術です。先端芽せん除をすることにより、無処理に比べ収穫果数あたりの摘蕾作業効率が20%程度向上し、1樹あたりの摘蕾作業時間が約20%短縮できます（図16）。



通常のせん定作業



結果母枝先端4芽せん除

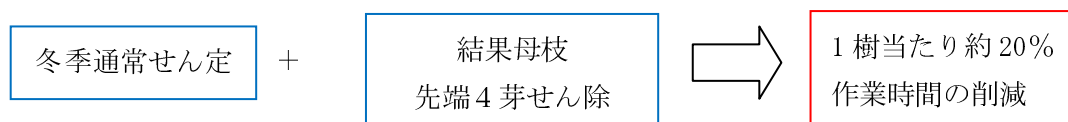


図16 結果母枝先端芽せん除の概要

### 【本技術の導入に向けて】

技術の実践

→ 参考データ 30ページ

「刀根早生」の成木において、全結果母枝のうち、20cm以上の長めの結果母枝は約40%以下と低いのに対し、総着蕾数のうち約70%程度は、長めの結果母枝に着蕾しています。このことから、摘蕾作業の省力化は、長めの結果母枝に対し先端芽せん除処理を優先的に行うと効率的です。

作業の手順としては、まず通常の冬季せん定を行います。その後、残った約20cm以上の長めの結果母枝のうち、およそ4分の3の枝に対して、母枝先端約10cm（4芽程度）をせん除し、先端芽は横芽か下芽を残すようにします（図17）。処理枝を選択する際には、せ

ん定ばさみの全長がおよそ 20cm ですので、これを目安としてください。その際、主枝先端部への処理は樹形の乱れを招くため避け、側枝の母枝に処理します。また、立ち枝への処理はその枝の樹勢が強くなる可能性があるため、斜め上向き～水平気味の母枝を中心に処理します。



図 17 結果母枝先端芽せん除処理の様子

先端芽せん除処理により、やや葉が大きくなるものの、生理落果等への影響はみられず結実状況や収量に悪影響はありません。また、果実品質や着色にも影響はみられません（図 18・19）。



図 18 先端芽せん除後の結実状況



図 19 着色に影響はない

**【留意事項】**

- 本技術は「刀根早生」で試験を行ったものであり、その他の品種については未確認です。
- 先端芽せん除処理により、葉が大きくなるなど樹勢は若干強くなるものの、果実品質、収量等に大きな差はありません。
- 樹勢が極端に強い樹への処理や、過度なせん除処理は樹形や樹勢の乱れを招くため避けてください。